

【旧約聖書日課】ヨシュア記 1章1～9節

¹主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。

²「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。³モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。⁴荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。⁵一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。⁶強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。⁷ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。⁸この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。⁹わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

¹五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、²突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。³そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。⁴すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。

⁵さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、⁶この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。⁷人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。⁸どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。⁹わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者があり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、¹⁰フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、¹¹ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

【福音書日課】 マルコによる福音書 4章26～34節

²⁶また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、²⁷夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。²⁸土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。²⁹実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

³⁰更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。³¹それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、³²蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

³³イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。³⁴たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

聖霊に満たされて【こども説教のために】

ペンテコステおめでとうございます。主イエスのご復活を記念したイースターから五十日目、教会は聖霊降臨の祝いのときを迎えました。

ご復活の主イエスが天に昇られるのを見届けた使徒たちは、約 120 人の仲間の弟子たちと一つになって祈っていました。主イエスが、天に昇られる前に、「父の約束されたものを待ちなさい」（使 1:4）とおっしゃられていたからです。それは、「聖霊」の約束でした。「あなたがたの上に聖霊が降る」（同 1:8）と、主イエスはお約束くださっていたのです。

五旬祭（＝七週祭）という祭りの日。エルサレムの町は、祭りを祝う人たちで溢れていたことでしょう。神殿に詣でた人々は、街の賑わいに酔いしれていたかもしれません。そのような中であって、120 人の弟子たちは、一つの家を集まっていたのです。ところが、**突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、…家中に響いたのです。**それは、何かの合図だったのかもしれませんが。座っていた弟子たちは、互いに顔を見合わせました。不思議なことに、見慣れたはずのお互いのことが、今までとは違って見えます。お互いの上に、**炎のような舌が分かれ分かれに現れているように見えたのです。**弟子たちは気づきました、それが主イエスのお約束くださっていた聖霊だ、と。そのときから、彼らは、お互いの語る言葉が、今までとはまったく違って聞こえ始めたのです。お互いに、神の偉大な業を語る言葉として、聞き合い始めたのです。

わたしたちも互いの内にお働きくださる聖霊を見えています。一人ひとりに聖霊がとどまってくださり、神の御業を語る者にしてくださっているのです。

一つになって集まっていると

今年も聖霊降臨を祝うために、子どもたちと赤い風船で礼拝堂を飾りました。コロナ禍後、毎週の主日礼拝を子どもたちと一つの礼拝としてから、こどもの教会（教会学校）の取り組みとして続けてくださっています。ただし、今年は少し控えめの風船にしました。昨年までのように風船を大きく膨らませるのを控えることにしました。礼拝中、大きな赤い風船がいくつも揺れているのが気になって落ち着かない、というご意見があったからです。そこで、昨年までは大人の頭よりも大きく膨らましていた風船を、今年は、生まれたばかりの赤ん坊サイズにすることにしました。また、風船があまり揺れないように飾ってもらうことにしました。

そこまでして風船を飾らなくても良いのではないかとお考えの方もあるかもしれません。確かに、礼拝堂はパーティ会場ではありません。わたしたちが神の御前に進み出て頭を垂れ、祈り、讃美を歌い、御言葉を聞くところです。余計なものは何も無いのが一番良い、と考える方もあるでしょう。その通りだと思います。わたしたちの礼拝に不要なものであれば、取り除いたほうが良いでしょう。けれども、わたしたちが不要だと思ったものがすべて、本当に不要なものでしょうか、どうしたら分かるのでしょうか。

天に昇られた主イエスを見届けた後、弟子たちは皆、一つに集まっては、心を合わせて熱心に祈っていた（使1:14）と言います。五旬祭の日も、彼らは、心を合わせて祈るために、一つになって集まっていたのでしょうか。家の外では、祭りを祝う人々が行き交っていたに違いありません。雑踏の音になる者もあつたでしょう。彼らは、昼間から扉を閉め、窓を閉じて、どうかして静かな空間を保って、自分たちの祈りに集中したいと思っていたのではないのでしょうか。お互いのことさえ目に入ってきて気にならないようにと、皆、目を閉じて静かに座っていたのかもかもしれません。

ところが、そこに思わぬ妨害が起こったのです。**激しい風が吹いて来るような音**です。彼らのいた家中に響き渡ったというのですから、実際に、閉じられていた窓や扉が勢いよく開いて突風が吹き込んで来たのではないのでしょうか。静かに祈るどころではありません。思わず目を上げて周りを見渡し、互いに顔を見合わせたのでしょうか。そして、語り出したのです。

そのとき、一つになって集まり、静かに心合わせて祈ることを願っていた弟子たちが見出したものがありました。互いの上、一人ひとりの上にとどまっているものです。聖霊です。そこに聖霊が働き、しかも一人ひとりがその聖霊に満たされていることを、彼らはそのとき、知ったのです。それを知るために、あの**激しい風**が必要でした。**炎のような舌が分かれ分かれに現れている**のを見ることが、彼らには必要でした。

一人ひとりの言葉で

主イエスが天に昇られるまで、弟子たちは、いつも一人の人の話を聞き、一人の人の言葉に従っていました。主イエスお一人です。わたしたちも、主イエスお一人に聞き、主イエスお一人の言葉に従うよう、導かれてきました。ある人たちは、「だから教会も、主イエスお一人に聞き従うように、ただ一人の牧者に聞き従うべきだ」と言います。

けれども、主イエスが天に昇られた後、五旬祭の日に聖霊に満たされる経験をした弟子たちは、ただ一人の指導者に語らせることをしませんでした。皆が語るにまかせたのです。**炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人ひとりの上にとどまっている**と信じたからです。**聖霊に満たされているのは一人**ではなく、一同皆だと信じたからです。聖霊に満たされた一人ひとりが、霊が語らせるままにしたのです。

それを、混乱だと言う者はいませんでした。いいえ、周囲の者たちには、混乱しているように見えたのかもしれませんが。その様子を見た者の中に、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」(使 2:13) という者もいたのです。それでも、弟子たちは、混乱だとは考えませんでした。皆がそれぞれに相手を見つけて語り出すことを、使徒たちは止めませんでした。一人ひとりが、聖霊の導きを信じて、相手に伝わる言葉を探して語り始めたことを、教会の記録としたのです。そこから教会が始まったと、伝えてきたのです。

弟子たちは、主イエスのように御言葉を語る力を持っていたわけではなかったでしょう。使徒パウロはラビの学校で聖書を学んだと言いますが、ガリラヤで主イエスに従うようになった弟子たちのほとんどは、幼いころから会堂で聖書の朗読を学んだ以外には、特別な訓練を受けていなかったに違いありません。使徒たちは、それでも主イエスから多くのことを聞き、学んでいたかもしれませんが。主イエスは、人々にたとえを用いて教えられたときにも、使徒と呼ばれるようになる十二人の弟子たちには、詳しく教えを説明されることがあったのです。それでも、使徒たちは、自分たちだけが語るのではなく、皆が語るようになることを良しとしました。主イエスに結ばれた者には皆、聖霊がお働きくださり、神の御業を語る言葉が与えられている、と信じたからです。

神の御業を語る者と共に、神はいてくださるでしょう。主イエスと共にいてくださった神は、主イエスと結ばれた者とも共にいてくださるでしょう。たとえ本人に自覚がなくても、わたしたちは、互いのことを、神が共にいてくださる者として証しするのです。主イエスと結ばれるよう導かれて来た一人ひとりだからです。一人ひとりが異なる言葉を話していたとしても、なお、わたしたちは、神が共にいてくださる者と共にいることを選ぶのです。